

介護福祉のイメージアップ

－小学校講座を通した福祉教育－

Improving the Image of Care Welfare

- Elementary school welfare education -

北村 光子

要旨

社会は少子化による社会的な需要と供給のアンバランスが生じ、求人しても雇用に至らない現象が生じている。介護社会においても国家資格を持った「介護福祉士」の雇用獲得は難しい状況がある。また、「介護」や「介護福祉」のイメージは決して良いとはいえず、それが求人疎遠の要因にもなっている。この現状の中で、国は人材不足を外国人雇用や介護ロボットの導入に積極的な姿勢をしめしている。この対策は、介護教育機関として、憤りを感じる。その様な中で将来の介護福祉士を教育するために今、できることは、介護のイメージ払拭であると考え、微力ながら学生を通して、将来の介護福祉士人材育成に取り組んだ。それは、地域一般や高校生からの情報をもとに小学生講座の開講である。この活動を通して、卒業後の介護離れを予防し、介護の魅力を再認識することを目的とした。

結果として、学生はこの一連の活動を通して、介護に対する想いを再認し更なる探究のきっかけづくりになっていた。今後も、介護普及のキャラバン隊になりうると考えられる。更に、この活動を通じ介護福祉士（学生や卒業生）の質の向上の一翼にもなる。

キーワード

福祉教育 小学校講座 介護福祉教育 地域文化

研究背景と目的

2015（平成 27）年 10 月 1 日現在の高齢者（65 歳以上）人口は、3,392 万人であり、高齢化率は、26.7%となった。総人口が減少する中で高齢者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、2035（平成 47）年に 33.4%で 3 人に 1 人となる。2060（平成 72）年には 39.9%に達し、国民の 約 2.5 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となると推計されている（内閣府、2016）。この現状から福祉社会における介護職の数獲得は必然である。しかし、介護福祉士を養成する養成校は年々減少する一方である。施設でも求人はするものの有資格者の雇用に至らなく無資格者を採用している現状である。この程、国は外国人雇用に対してさらに意欲的になりまた、ロボットの導入にも積極的な姿勢をしめた。

これらのことを踏まえると、介護福祉士に対する社会的ニーズはあるものの少子化の影響や介護に対する理解、魅力のアピール不足などの要因で、ますます介護離れが考えられる。これを打破するためには、様々な視点で計画を立案し着手する必要がある。その 1 つの方法として、将来的な介護福祉教育は、学生（卒業生含む）自身が介護の理解や魅力について発信していくことが有用であり、そのためには、学生がキャラバン隊になり地域に「介護の魅力」を伝えることである。また、そのことで地域との協働もでき、より地域連携もスムーズになると考えられる。

よって、本研究は、学生が「福祉教育」を軸に地域の小学生に対する「小学校講座」（本学と小学校）を通して、将来の介護福祉士の人材育成やそれを通じた学生の成長を一考察する。

1. 福祉教育の定義

「福祉」とは何か。また、「福祉教育」とは何かを定義すると、「福祉」は幸せ、幸福と表される。「教育」とは「教え育てること」また、「ある人間を望ましい状態にさせるために、心と体の両面に、意図的に働きかけること」（デジタル大辞泉 2017）更に、新村は「教育を受ける人の知識を増やしたり、技能を身につけさせたり、人間性を養ったりしつつ、その人が持つ能力を引き出そうとすること」（新村出編集 2008）である。

また、「福祉教育」について全国社会福祉協議会に設置された福祉教育研究会は定義をしめしている。「憲法第13条、25条等で規定された基本的人権を前提にして成り立つ平和と民主主義社会をつくりあげるために、歴史的にも、社会的にも阻害されてきた社会福祉問題を素材として学習することであり、それらと切り結びを通して、社会福祉制度・活動への関心と理解を勧め、自らの人間形成を図りつつ社会福祉サービスを受給している人々を社会から、地域から阻害することもなく、ともに手をたずさえて豊かに生きていく力、社会福祉問題を解決する実践力を身につけることを目的に行われる意図的な活動である」（全社協他、2003）と述べている。そして、大阪府は、小学教育の中で「ともに学び、ともに生きる」理念に基づいた教育活動と「すべての人々の生き方にかかわる教育活動」の2つを提示している。（大阪府教育委員会、2010）

以上のことから、ここでは「福祉教育」を「歴史的背景から社会問題について学び、それを通して全世代（子どもから高齢者・障害者・児）が共に豊かに生きていく力を教え育てること」と定義する。

Ⅱ. 福祉教育の領域

原田は、福祉教育の領域について3領域に区分している。図1に示すように、①学校福祉教育（学校を中心とした福祉教育）、②地域福祉教育（地域を基盤とした教育）、③社会福祉教育（社会福祉専門教育の領域）である。このことは、「学校教育」と「地域福祉教育」、「社会福祉教育」は相互に関連しており、単独ではできない事を示している（原田2014）。

現代の社会において「福祉」への関心は高いとはいえない。それ故、この3領域を「福祉教育」として社会に定着する為には、幼児期に値する幼稚園・保育園から小学校、中学校、高校の教育カリキュラムにおいて計画的に教授することによって、関心は高くなると推測する。既に、2000年から段階的に小学校カリキュラムでは総合的に学習する時間を設け、「福祉教育」に取り組んでいる所もある。ここで学び育った子どもらが大人になって「福祉」の素晴らしさを継承していくならば明るい展望が期待される。また、介護福祉教育においても、原田の論は代用できると考える。

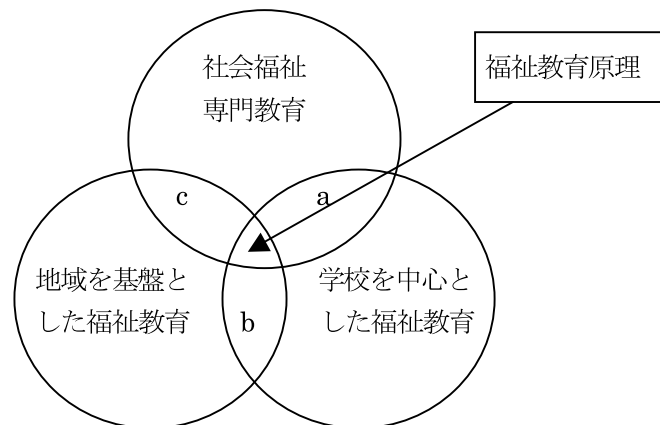


図1 福祉教育の3領域

出典：原田正樹（2003）『福祉教育実践ハンドブック』

Ⅲ. 小学校講座の展開

1. 研究方法

(1) 調査対象と期間

調査対象：本学の学生、2015 年（平成 27 年）2 年生 16 名を対象とした。

期 間：2014 年 10 月～2016 年 10 月

(2) 方法

介護福祉士養成科目「介護の基本」、「福祉文化」において、「福祉」や「介護福祉士」の現状を文献により調査し学生間で検討した。また、それに基づいた介護福祉に関するアンケート調査を学祭の来校者に対して実施した。その後、福祉教育を実施している高等学校へのアンケート調査も実施した。その一連の過程から、「小学校講座」に至るまでの活動経過を基に学生の成長を KJ 法により分析する。

2. 結果と考察

1 年次の科目「介護の基本」で「介護」の現状を教授し、今後の将来像を検討した。その結果、3K（きつい、汚い、給料が安い）イメージが継続すると、ますます、人材確保が厳しいことが学生間で結論づけられた。また、この現状では介護の質も向上する見込みは薄く、今後の介護を担う世代が介護のマイナスイメージの基に生活する危険がある。そこで、学生は、介護の素晴らしさを伝えるプロジェクト（キャラバン隊）を形成した。

第 1 段階として、地域の住民や高校生がどのような介護のイメージを抱いているのかを調査した。その結果を踏まえ第 2 段階として、「小学校講座」に発展した。

(1) 授業光景

1) 「介護の基本」での様子

「介護」の歴史的背景を旧石器時代から現代までを調べ、歴史の中での特記事項と介護との関わりを各グループで発表する。その後、学生間で検討会を実施する。

内容は、旧石器時代から安土桃山時代のグループでは、旧石器時代から共同体の形成はあったが大和朝廷の時代になると、仏教伝来により慈悲思想に基づく救済活動は始まり、593 年、聖徳太子は四天王寺として四箇院建立をする。キリスト教の伝来により「隣人愛」が広まり、長崎市においては 1583 年「ミゼルコリディアの家」建立される。これは、①老人および貧しい男子。②老婦人および貧しい婦女子。③不治の病人などの収容をする施療院である。週 2 回喜捨金を求め、経営維持をしていた。この活動は、1587 年、秀吉氏のキリシタン禁教令後や 1614 年、徳川幕府による禁教令後も許可され 1919 年まで継続される。

また、江戸時代のグループは、中央である江戸では、病人がでると世話人を中心に①近隣に見舞いや介護の協力をお願い。②食事を調理し病人の家まで運ぶことの依頼。③病人の通院や入院（小石川養生所など）の世話など近所の支え合いで成り立っていた。一方、地方では、家族内で介護をしていたと報告した。それは、林によると次のように述べている。

つるの介護

1756（宝暦 6）年

33 歳の時に、領主より若干の銭をもらう

つる：独身

家族：父、母、姉、兄

父母：目を患い盲目に。

“貴人”をもてなすように介護。厠に行く時も付き添い、時には手を引いて仏寺詣でに。

兄：生まれつき病気がち、心の病もあり働けず。

だんだん病状は悪化し、戸が位に走りだして声高にわめいて暴れたりした。

近所の人に許しを請いながら介護した。

姉：すでに嫁いでいた為、当てにできず

近隣、親族：結婚をすすめる。兄の出家や檻に監禁等を提案。おすそわけ。

↓

つる：周囲からの援助はすべて断る。生計は一人で豆腐を作り、販売。税もきちんと納めた
(林, 1993. p400)。

はなの介護

1980 (安永 9) 年

44 歳の時の孝行を理由に褒美の米をもらう

家族：舅、夫、祖姑 (舅の継母)、姑、娘 5 人

舅：70 歳あまりになると、病気がちになり農作業に出ることも困難。ここ 3 年来は不眠に悩まされ、薬を手放すことができない。夜になると前後を忘れてしまうので、そばについての看病が必要。

夫：5 年前ごろから肺癌を病む。昼夜となく口から膿血を吐きだす。

さらに、去年の夏ごろから脇の下に腫物ができ、こちらからも膿血が出る有様。

外科の医者に頼んでも一向に回復の兆しは見られず。

祖姑：90 歳に手が届くほどで歩みもかなわなくなる。

姑：老い衰え。

長女：病気がちで夜毎に腹痛。

次女：足を痛める。

残る 3 人の娘も病気がちか幼すぎて頼りにならず。

↓

はな：四反三畝余りの田畑の手作りをしながら、投薬・食事の世話・衣服にまで気を配る。

また、農間には近隣に日雇いでて薬代を稼ぐ。樋守役という町内の係もつとめる。

(同上, P337)。

など、その時代の中央と地方の相違を発表しこれも学生間の共通の学びとなった。

明治・大正時代のグループでは、「介護」用語の分類は一般に 1892 (明治 25) 年、陸軍傷痍軍人の恩給に関して発令された「陸軍軍人傷痍疾病恩給等差例」や 1923 (大正 12) 年制定の恩給表別表にもこの言葉は既に使用されていた。しかし、「介護」という言葉は使用されているものの施策ではなく、恩給の給付基準としての概念であることが学生間で理解できた。

更に、昭和から平成時代になると、高齢社会に伴い、①高齢者保健福祉推進 10 カ年計画 (ゴールドプラン)。②新ゴールドプラン。③ゴールドプラン 21。④新オレンジプランと施策がある。このような時代背景のもと学生たちは将来の介護福祉士として、今できることはないかと模索しはじめ地域一般の人や高等学校に対してアンケート調査を実施した。

2) アンケート調査

2014 年 10 月白蝶祭 (学祭) に来校した一般 213 名 (有効回答 199 名) と高等学校 2 校 413 名にアンケート調査を実施した (図 - 2, 図 - 3 参照)。

調査項目は、①「介護の日」を知っているかについて。②介護と聞いて思いつく色について。③現在、介護

を受けている家族、親戚について。④将来家族、親戚に介護が必要になった場合、在宅と施設どちらで介護するかについて。⑤現在、地域の交流や高齢者との交流について。⑥属性。

この結果は、報告書（図－4）としてまとめ各高等学校へ配布した。

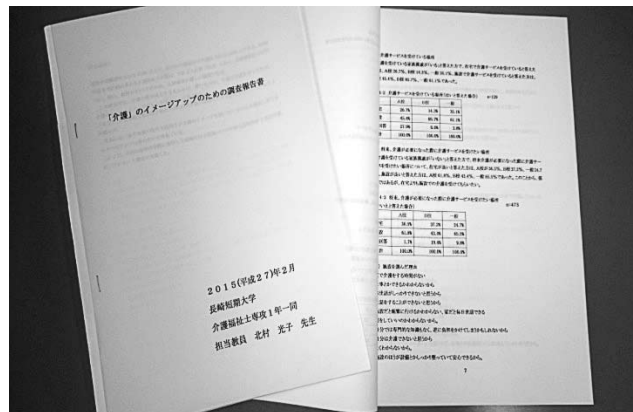
更にこの調査に基づき今後の課題として、学生自身が「介護の良さ」や「介護のイメージ」を広げていくためには学校訪問や高齢者体験等を通し、もっと身近に感じる介護にしていけることが大切であることや、そのためには地域住民、一般の人に介護の内容をより周知、理解するための活動をしていく必要があると結論付けた（北村他、2015）。



図－2 学祭でのアンケート様子（1）



図－3 学祭でのアンケート様子（2）



図－4 報告書

3) 小学校講座

今までの調査を通して介護福祉に対するポジティブな気持ちで受け止めるのは世代の若い小学生・中学生でないかと考え講座を計画した。また、教育機関の背景も平成10年7月の教育課審議会答申において、少子高齢者社会への対応等の中で「幼児、高齢者や障害者のある人と交流し、触れ合う活動や介護・福祉に関するボランティア活動を体験することを重視する必要がある。」（教育課程審議会1998）。また、遠田の中学生対象の調査では、「介護のイメージとして『人に役立つ』、『やりがいのある』、『責任が重く資格や勉強は必要な仕事』のイメージがあると報告されている（遠田、2008、P25）。このことから、中学生のイメージはむしろ良いイメージがあることが伺える。また、福祉教育の導入に中学校では、「総合的な学習の時間」「生徒会」、「学校（学年）行事」が多い。小学校では中学校と同様に「総合的な学習の時間」や「道徳」と教科での取り組みが多く、義務教育においても積極的な福祉教育が促進されている状況である。

以上の事を踏まえると、小学生に対する先行研究はなくまた、福祉教育において「総合的な学習時間」を設けていることから地域の教育機関と連携するには、小学校が適当であると考え小学校講座を開催することとした。

小学校講座は、対象は2015年、市内の地区を北・中央・南とランダムに分け抽出し3校訪問した。2016年は、1校に絞り縦断的研究のため対象を4年生とした(図-5(1)、(2)参照)。

講座内容は、学生が作成したDVD「高齢者が困っている一場面」や、ペープサートで「おおきなかぶ」(学生アレンジ)を見てのアンケート調査と小学生各々が感じたことを発表する。また、ゲームを通して高齢者の気持ちを考え、そこで得たことを小学生が発表した。

アンケート調査項目は、高齢者の方が①階段を上って来た時のあなたの行動について。②横断歩道を渡れない車椅子の高齢者を見た時のあなたの行動について。③今後、困っている人をみたらどのような行動をとるかについて。

この結果、小学生は福祉に対して関心度が高く98.0%の小学生が困っている人がいたら助けると答えていた。



図-5 小学校講座 (1)



図-5 小学校講座 (2)

Ⅲ. 結論

この介護イメージアップ作戦に参加後の学生(卒業生も含む)の成長過程を振り返る。まず、このイメージアップ活動の参加の動機は、図-6より、介護の名称を「周知したい」37.5%。介護のイメージを「良くしたい」25%。「介護の日」に因んで何かをしたい。18.8%。介護福祉士のイメージを良くしたい12.5%。となった。この結果、小学校講座をする以前から、「介護」や「介護福祉士」の現状をどうにか打破したい気持ちがあることが解った。

また、図-7より、小学校講座を通じて、「介護のイメージアップ」の継承を、「非常に伝えていきたい」62.5%。「やや伝えていきたい」31.3%。「どちらでもない」6.2%。「あまり伝えていきたくない」、「全く伝えていきたくない」は、共に0%であった。この結果から、伝えていきたい学生は、全体の93.6%と約9割強の結果となった。

更に、図-8より、学生の感想をKJ法によりまとめた。学生はこの活動を通じて、学生間の連携や小学校との連絡、調整の必要性。また、チームで活動することにより、チーム連携の大切さや良い経験ができたこと、介護の仕事ができることの幸せを感じていること等、達成感を感じており、この活動を後輩へと継承していきたいという気持ちがあることが解った。今後は、後輩だけでなく地域との関わりの中で介護の素晴らしさを伝えていきたいという気持ちも芽生えている。これは、卒後教育にも通じる。

結論として、学生が小学生に対する介護福祉講座を実施することは、学生自身の介護に対する想いを再認識し更なる探究のきっかけづくりの一要を担うことにもなり、介護普及のキャラバン隊になりうると考えられる。

将来は、講座対象とした小学生も成長し「介護の魅力」を心にとめ介護の道に興味を抱き福祉社会の礎になることを期待したい。

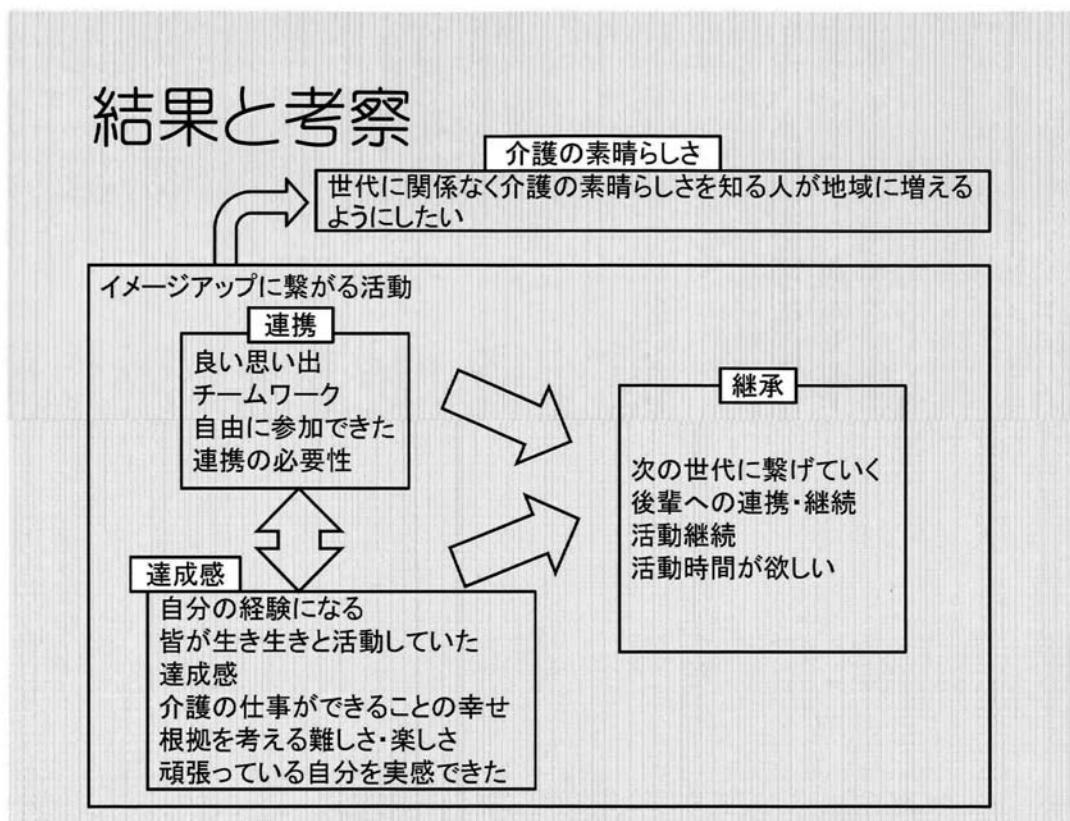
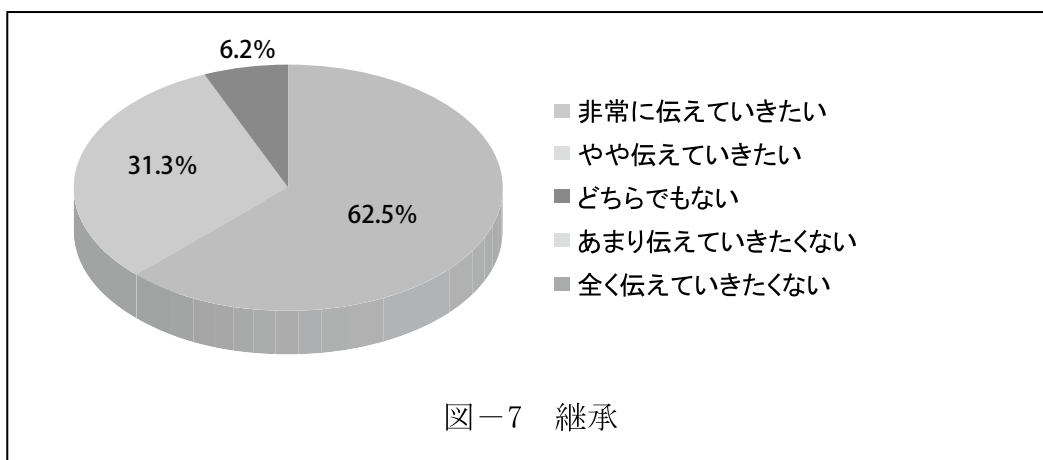
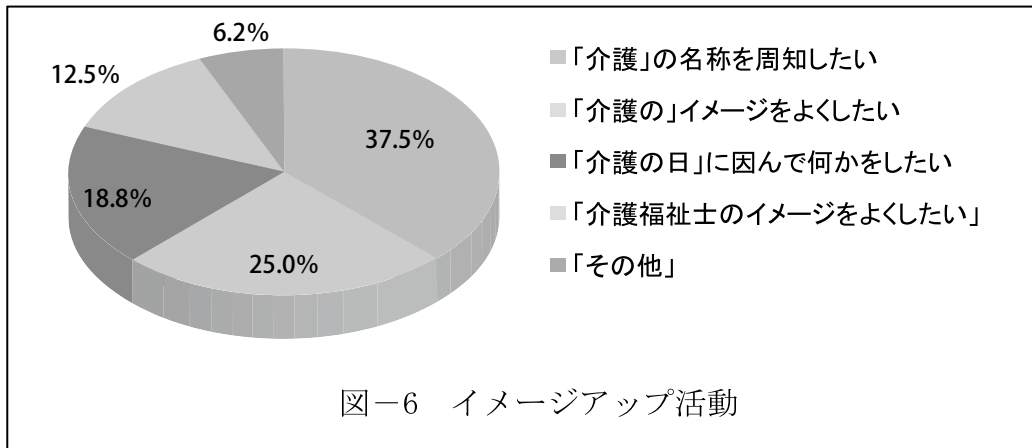


図-8 KJ法によるまとめ

IV. 今後の課題

小学校との連携強化や小学校講座の開催小学校の増加。卒業生と在校生の連携方法。小学生に対する講座の効果の検証がある。これは、遠田も「中学校、高等学校における福祉教育の積極的なマネジメント（中学校および高等学校との連携教育。出前授業や公開講座）を行い、より一層に、専門職としての介護福祉士の仕事を紹介し、中高生の社会福祉および介護福祉への関心と魅力を啓発する」（遠田、2008、P31）と述べていることにも共通する。

【引用文献】

- 内閣府（2016、6）『H28 年度版 高齢社会白書』日経印刷 1
- 小学館国語辞典編集部（2017）『デジタル大辞泉』<http://www.daijisen.jp/digital/>（2017、4、16 入手）
- 新村出編（2008）『広辞苑 第六版』岩波書店 687
- 全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター（2003）『福祉教育実践ハンドブック』全国社会福祉協議会、東京、19
- 大阪府教育委員会（2010）『大阪府福祉教育指導資料集『『ぬくもり』 ～思いやりを行動へ～』大阪府教育委員会事務局 市町村教育室 小中学校課 1－2
- 原田正樹監修（2014）『新 福祉教育実践ハンドブック』全国社会福祉協議会 24-25
- 林玲子（1993）『日本の近世』中央公論社 400
- 林玲子（1993）『日本の近世』中央公論社 337
- 遠田康美（2008）十勝における介護福祉士増員にむけての取り組み－中高生および介護現場職員に対する意識調査をふまえて－ 介護福祉教育, 14（1）：25

【参考文献】

- 岡正寛子（2006）「福祉教育の視点からみた高齢者の社会的役割と社会参加への支援」鈴鹿医療科学大学 研究紀要, 13：85－95
- 北村光子（2016）「小学生に対する介護福祉講座」；かいごへの気持を考える 第23回日本介護福祉教育学会 プログラム・発表要旨集, 65
- 佐藤真澄（2016）「小学校における福祉教育に関する一考察」山口学芸大学教育学部 研究紀要, 7：17-33
- 中村慎吾・北村光子（2016）「世代間交流の第一歩」；集計から見てきた現在の高齢者とのかかわり 長崎県介護福祉士会研修会
- 長崎県社会福祉事業史編集委員会編（1997）「長崎県福祉のあゆみ」；長崎県社会福祉事業史
- 長崎短期大学介護福祉専攻1年学生・北村光子（2015）「『介護』イメージアップのための調査報告書」
- 波野史良（2011）「江戸の庶民のかしこい暮らし術」河出書房新社
- 中澤秀一（2015）「介護福祉士の魅力を探る」；専門実践過程で得られるもの 介護福祉教育 20（2）：53-64
- 牧野修也（2012）『「地域社会お教育力」の再検討：「地域社会と教育」論を手掛かりに 神奈川大学 研究紀要, 6：15-30
- 山口善弘（2002）「小学校における福祉教育のカリキュラムのあり方」；福祉教育の体系化への取り組み、神奈川県立総合教育センター研究集録, 21：113-116
- 森敏昭他（2000）「大学生の自己教育力に関する発達的研究」；回想的質問紙法による分析、広島大学教育学部 紀要 1（49）：7-14